

第 五 幕

打ち開けたる土地

旅 人

そうだ！あれだな、あすこに小暗く茂って、
古木の力を見せているあの菩提樹だな。
俺はあんなに長かった旅の末に、
あの木立を再び見ることになったのだなあ！
これがあの昔の場所なのだ、
俺を救ってくれた小舎なのだ、
あの時は嵐に煽られた怒濤が
俺をあの砂丘に打ち上げたのであったが！
あの主人夫婦を俺は祝福したい、
人助けには何時でも乗り出す、善良な夫婦(めおと)だった、
あの人々に今日邂逅(めぐりあ)うことは覚束ないかも知れん、
あの時にももう随分の年寄りだったからなあ。
ああ！本当に信心深い人達ではあった！
扉を叩こうか？呼んで見ようか？---挨拶を受けておくれ！
今でもやっぱり客あしらいよく
善行の報いを享けておいでなさるなら。

バウキス

まあ、旅のお方！お静かに！お静かに！
そおっと願います！連れ合いをそおっとねかして置いて下さいましよ！
長眠(ながね)のお蔭で、年寄りは
寤(さ)めている長い間にちょこちょこ仕事出来るのですからね。

旅 人

言して下さい、おばさん、私のお礼を
受ける筈の方は貴女ですか？
昔、若い者の命を助けるために、貴女は
お爺さんと一緒に尽くして下さいたのでしたね。
貴女はバウキスさんですか？貴女はいそいそと働いて
半死の唇を濡らして下さいたのでしたね。

お爺さん登場

フィレモンさんでしたね、貴君はあの頼母しい力で
私の大事な物を湖の中から引き上げて下さった方ですね？
貴君方が手早く焚きつけて下さったあの火の焰、
貴君方が鳴らした半鐘の銀(しろがね)の音。
あの恐ろしかった危難の
仕末は貴君方に委ねられたのでしたね。
そこで私に、外へ出て
果てしのない海を見渡させて下さい。
跪(ひざまづ)かせて下さい、祈らせて下さい。
私の胸は押し付けられるようにいっぱいなのです。
(砂丘に歩み出す)。

フィレモン(バウキスに)。

急いで食卓の支度をおし、
小庭の、晴れやかに花の咲いているところへ。
あの人には、駆け廻って、驚いていさせるが好い、
目に見えるものが本当とは思われないのだから。

(旅人の傍に立ちつつ)。
貴君を恐ろしくいじめぬいて、
浪又浪をあげて荒々しく泡立った海が、
花園のようになってお待遇(もてなし)をするのを御覧でしょう。
楽園のような姿をしているのを御覧でしょう。
私も年をとり過ぎて、いつものように、おいそれと
早束手助けに出るわけには行きませなんだが、
私の力が衰えて行くにつれて、
浪も遠くへ立ち退いてしまいました。
賢い殿様方の大胆な御家来衆が
堀を廻ったり、堤(どて)を築いたり、
海の権(ちから)を狭めて、
代わって主人となろうとなされたのです。
御覧なさい、緑に列(つら)なる牧場々々や、
草地や、庭や、村や、森やを。----
だがあちらへ来て何か上がって下さい、
お日様が間もなく沈みましょう。----
あのずっと遠くの方を幾つか帆が通りますね！
あれは夜の安らかな泊(とまり)を求めているのです。
鳥だってその埒(ねぐら)は知っているでしょう、
今は彼処に港が出来ているのですよ。
貴君はずっと遠くの方に、やっと、
海の青い縁(へり)を御覧になるでしょう、
右も左もずうっと広く、
軒を並べた人里となっていました。
(小庭にて三人卓に就く)。

バウキス

貴君はずっと黙ってお出でですね？お腹(なか)が空いていまいしょうに、
食物(たべもの)を一口も召し上がらないのですか？

フィレモン

あの不思議の話が聞きたいと思し召すのだろう、
お前はひどく話し好きだ、お話ししてあげるが好い。

バウキス

よござんす！あれこそ本当の不思議でしたよ！
今になっても私は気が鎮まりません。
一体あの仕事は何から何まで
怪しい事ばかりでしたもの。

フィレモン

カイザー様が罪になるようなことをなさるものかね？
あの方があの人にこの海岸をお授けなさったのだよ。
お先触れがその旨を触れて
鳴り物を鳴らしながら通ったじゃないか？
この砂山から遠くないところで、
仕事の最初の手が着けられたのだった、
天幕が張られる、小屋が建つ！----やがて緑の間に
間もなく一つの御殿が出来上がりました。

バウキス

昼には御家来衆がたがたが、がやがや騒いでばかり居ました、

鍬やしゃべるをさくさくと使いながら。
夜になって小さい焰が群がって燃えていたかと思うと、
翌の日には堤が一つ出来上がっていました。
人身御供(ひとみごくう)の血も流れたに違いありません、
夜分に苦しみ叫ぶ声が響いて、
火炎が幾つも海の方へ流れて下ると、
朝には一つの堀割が出来ているのです。
あの方は神様を恐れぬ人で、私どもの
小屋や木立(こだち)をも欲しがって居られます。
それがお隣にいて威張っていられるので、
へいへいしているより外致し方がありません。

フィレモン

それでもあの方は私達に、新しい土地の中で
立派な地面をやろうと仰有(おっしゃ)ったのだよ！

バウキス

埋立地なんか信用なさらぬが好い、
この高い場所を離れちゃいけません！

フィレモン

みんなでお御(み)堂へ行きましょう！
入り日の名残を見送るために。
鐘を鳴らして、跪いて、お祈りをして
昔ながらの神様にお頼りしましょう！

宮 殿

広き遊苑。大いなる、直線を為せる堀割。
極めて老齢に到れるファウスト、沈思しつつ漫步せり。

望楼守リュンコイス(通話筒を通して)。

日は沈んで行く、最後の船々が
勇ましく港へはいって来ます。
大きな荷船が一艘、堀割を
こちらへ来ようとして居ます。
色とりどりの旗が心地好げに靡いて、
がっしりした檣(ほばしら)が備えを整えて聳えています。
御領内に来て、船頭は我が身の仕合わせを有難く思うでしょう、
幸福は、この盛時を祝って、貴君に御会釈を申し上げます。
(砂丘の上にて鐘の音響く)。

ファウスト(憤然として)。

詛われた響き奴！ひどく不作法に
俺を傷つけおる、きまぐれに射る矢のように。
眼の前には俺の領地が無限に広がっている、
背後(うしろ)では癩の種が俺にからかって、
物妬(ねた)みする鐘の音を使って俺にこんなことを思い出させる----
俺の立派な所領にも邪魔物がある、
あの菩提樹の森、あの茶色の板小屋、
あの腐れかかったちっぽけな会堂は俺のものではない、と。
そうして彼処へ行って気晴らしをしようと思うと、
他物(よそもの)の影が俺を身顫いさせる、
あれは眼の刺(とげ)、蹠(あしうら)の刺だ、

ああ！此処から遠く離れてしまいたいなあ！

望 楼 守(前と同じく)。

あの色とりどりの荷船が、喜ばしげに帆を張って
爽やかな夕風に任せて近寄って来ますこと！
あの疾(はや)い船足が、大箱、小箱、囊(ふくろ)などを
積み上げて、見えて来ますこと！

華やかなる荷船。異国の産物を、豊かに、眼もあやに積みり。
メフィストーフエレス。三人の勇者仲間。

合 唱

そりゃ、上陸だ
そりゃ、もう着いた。
目出とう来たぞ、主人の許(ところ)へ、
旦那の許へ！
(彼等下船す、積み荷は陸揚げせらる)。

メフィストーフエレス

これで俺達の腕試しはすんだぞ、
旦那が褒めてくれさえすりゃ申し分なしだ。
たった二艘の船で出かけて行ったが、
今、二十艘にして港へ帰って来た。
俺達がどんな大仕事をしたかは、
この積み荷を見ればわかることだ。
自由な海は精神を自由にしてくれる、
彼処にいて思案なんぞをする奴があるか！
役に立つのはただ素早く攫(つか)むことだ、
魚も捕(つら)まえる、船も捕(つら)まえる、
そうしてまず三艘の御主人になりさえすりゃあ
四艘目は鈎(かぎ)で引っ張り寄せる。
すると五艘目も亦御難だ、
腕力がありさえすりゃあ権利もあるのだ。
何を掴むかが問題だ、どうして取るかは問うに足らぬ。
俺が航海業のずぶの素人ならいざ知らず----
戦争と貿易と海賊と、
こいつは三位一体で、分けることは出来んのだ。

三人の勇者仲間

礼も言わねば挨拶もされぬ！
挨拶もせねば礼も言われぬ！
俺達が旦那に
臭い物を持って来て上げたように。
旦那はいやあな
顔をしていなさる。
王者にふさわしい宝でも
旦那はお気に入らんのだな。

メフィストーフエレス

此の上に御褒美を
貰おうとは思うなよ。
お前達は銘々の
分け前を取ったじゃないか。

勇者仲間

あれはただ
退屈凌ぎさ。
俺達はみんな、分け前を
平等にして貰いたいんだ。

メフィストーフェレス

先ず上の
広間広間に、
宝物の数々を
みんな並べろ。
旦那がお出になって
たっぷり並べた品物を御覧になり、
何もかも、もっと詳しく
当たって見なさったら、
まさかあの方が
けちな真似もなさるまい、
きっと乗組みの者を
宴会責めになさるだろうよ。
五色の鳥は明日(あした)着く、
その世話は俺がしっかりする積もりだ。
(積み荷運び去らる)。

メフィストーフェレス(ファウストに)。

貴君はむずかしい額をして、陰気な眼をして
御自分の優れた幸運の話をお聴きですな。
高遠な智慧がその功を全くして、
岸と海との和解が出来たのですよ。
海は喜んで岸から船を受け取って
これを速やかな道に送り出す。
此处から、此处の御殿から、貴君の腕が
全世界を抱き締めると言ってもいいのです。
此の場所からそれが着手されたのでした、
此处に最初の掛け小屋が建ったのでした。
古溝が一條(ひとすじ)、割れ目をつけて掘り卸されて行ったところを
今は橈(かい)が忙しく波を切っています。
貴君の高い見識と御家来衆の勤勉とが
海と陸との萃(すい)を手にとめたのです。
丁度此处から----

ファウスト

その詛われた此处奴！
此处こそ俺をひどく悩ましている。
万事を心得ているお前に、俺は打ち明けずにはいられない、
俺の胸には絶えずちくちく刺すものがある、
もうどうにも辛抱が出来なくなった！
それを口に出すのが俺は恥ずかしい。
あの丘にいる年寄りどもを立ち退かせたい、
あの菩提樹を俺の物見にしたい。
俺の物にならぬあの僅かばかりの木立が、
世界を我が物にする俺の気を腐らせるのだ。
広く四方を見遙かすように、俺は彼処に、

枝から枝へ足場をかけさせ、
広々とした眼路(めじ)を拓いて
俺の為遂げた一切のものを眺め、
人間の精神が作った傑作を
一目で大観したいのだ----
賢明な心を働かして作り上げた、
民のために獲得した広い人里を。

そうしたわけで、最も峻(きび)しく我々を悩ますものは、
富んでいながら身に闕(か)けたものを感じることだ。
あの鐘の響き、あの菩提樹の匂いは、
俺を立ち籠めて、寺か墓穴の中にいるような気にする。
何物にも屈せぬ意志の力も
この砂丘に衝(つ)き当たっては打ち挫(くじ)かれる。
俺はどんなにあいつを心の外に追っ払おうとすることだろう！
鐘が鳴り出すと俺は物狂おしくなる。

メフィストーフェレス

そうでしょうとも！そんなにひどく気になることが一つあれば、
それが貴君の人生を苦(にが)くするのは当然(あたりまえ)だ。
誰がそれを無理と言いましょう！高尚な耳なら誰にでも
あの響きはいやあに聞こえるのです。
そうしてあの呪われたびいん、ぼうん、びんは、
晴れやかな夕空をも霧に包んで、
あらゆる出来事の中にまじって、
産湯から葬式までついて廻ります、
まるでびいんとぼうんの間に挟まれて、
人生は踪(あと)を消した夢でもあるかのように。

ファウスト

反抗と、片意地とが
どんなに素晴らしい収穫にも邪魔を入れるので、
それが深い、恐ろしい苦みとなって、
正義を念ずる心さえ倦み疲れずにはいられないのだ。

メフィストーフェレス

この場合何を遠慮してられるのです、
とっくの昔新開地へ移せばよかったのじゃありませんか？

ファウスト

そんなら往ってあれ達を立ち退かしてくれい！----
あの美しい邸はお前も知っている、
あれは俺が年寄りどもの為を選んで置いたものだ。

メフィストーフェレス

奴等を運んで行って下へ置けば、
見返る隙も待たずに起き上がっていますよ。
強制も、受けてしまったあとでは、
美しい住まいが埋め合わせをしてくれます。
(彼、鋭く口笛を吹く)。

三人の者登場。

メフィストーフェレス

さあ来い！旦那のお指図だぞ、
そうして明日は艦隊祝いがある。

三 人

年寄りの旦那はひどい待ち受け方をなさったが、
歓待の祝いぐらいはあっても好いや。
(退場)。

メフィストーフェレス(見物に)。

大昔にあったことが又此处でも持ち上がりますね、
ナボットの葡萄山というのがとっくにありましたよ。
(列王紀略上、第二十一章)。

深 夜

望楼守リュンコイス

(城の望楼にありて、歌う)。

見るために生まれて来て、
物見の役を仰せつかって、
誓って塔に身を委ねれば、
俺には此の世が面白い。
俺は眼を遠く放つ、
俺にはみんな近く見える、
月も星も、
森も鹿も。
そうしたわけで凡ての物に
俺は永遠(とわ)の飾りを見るのだ。
凡てが俺に気に入るように、
俺も亦俺に気に入る。
仕合わせな二つの眼(まなこ)よ、
お前がこれまで見て来たものは、
そのありようの己がむきむき、
みんな如何にも美しかった！
(間)。

だが俺は身の楽しみの為ばかりに
こんな高い所へ上げられているのじゃない。
何という凄まじい怖ろしさが
あの闇の世界から俺に襲いかかることだろう！
火の粉が、菩提樹の二重に暗い夜を貫いて
迸(ほとばし)り出て来るのが見える。
吹き立つ風に煽られて
火勢は愈々強く狂う。
ああ！木蔭の小屋が燃え上がる、
苔蒸して湿って建っていたのが。
早速(さっそく)の救助が必要だが、
手近に何の助けもない。
ああ！あの善良な年寄り達は、
日頃あんなに火の用心がよかったのに、
火焰の餌食になってしまうのだなあ！
何という恐ろしい災難だろう！
焰が燃え立つ、猛火の中に赤く、
黒い・苔むした屋根が立っている。

燃え狂う地獄の中から
あの善人達が逃げ出してくれればいいが！
舐め廻りながら、灼(や)く稲妻が立ち騰(あ)がって来る、
葉の間にも小枝の間にも。
大枝は乾いて、ちょろちょろと燃えて、
早速焼けては落ちてしまう。
この眼よ、お前はあれを見定めなくてはならんのか！
俺はこんなに遠目が利かなくてはならんのか！
小さいお堂は潰れてしまう、
落ち重なる枝の重みで。
尖った炎に蛇のように巻かれて
木々の頂ももう攫(つか)まれてしまった。
うつろな幹が根まで燃えて、
緋色に赤く火の中に立つ。----
(長き間。歌)。
日頃人目を慰めた樹も、
幾百年の齢も滅びた。

ファウスト(露台にありて砂丘に対す)。
上の方から聞こえるのは、何という悲歌の歌だろう？
今は言葉も叫びももう遅すぎる。
望楼守が歎いている。性急(せっかち)に過ぎた業(わざ)が
心の奥で俺を悩ます。
併し菩提樹の木立が滅びて、
酷(むご)ったらしく半分炭の幹になっても、
間もなく一つの望楼が建てられて
果てしなき展望を恣(ほしいまま)にするようになるのだ。
あの老夫婦に住まいさせる
新しい家も俺の眼に浮かんで来る。
あの人達は、心の寛(ひろ)い仁恕(じんじょ)の情に感じて、
その余生を喜び楽しむのだ。

メフィストフェレスと三人の者(下にて)
私達は早駆けでやって来ました。
御免なさい！穏やかには行きませんでした。
扉を打っても叩いても、
いつまでも開けてはくれません。
ゆすぶったり叩き続けたりしているうちに、
腐った扉が倒れました。
怒鳴ったり、ひどく脅したりして見ても、
ちっとも耳を藉(か)しません。
こんな場合によくある奴で、
聴きもしなければ、聴こうともしない。
でも我々は愚図々々せずに、
早速貴君の為に彼奴等を片付けました。
夫婦は大して苦しみもしませんでした、
びっくりして魂を失って倒れたのです。
一人の他処(よそ)者が其処に隠れていて
刃向かおうとしましたが、其奴はのしてやりました。
激しい闘いのちょいとの間に、
あたりに散らばった炭火のため
藁が燃え出しました。其処でそれが勝手に燃え上がって
あの三人の火葬の薪となったのでした。

ファウスト

お前達は聾(つんぼ)で俺の言葉が聞こえなかったな！
交換する気ではあったが、強奪する積もりではなかった。
無思慮な、荒っぽい振る舞いを
俺は詛う。詛いはお前達分けて背負え！

合 唱

古い文句が、あの極まり文句が、響いて来るぞ！----
威勢には素直に靡(なび)け！
お前が向こう見ずで逆らいたけりや、
家も屋敷も----身も賭けろ。
(退場)。

ファウスト(露台の上にて)。

星の瞬きも光も隠れた、
火は沈んで小さく燃える。
一陣の凄風(せいふう)がそれを煽って、
煙と匂いを俺の方へ吹き寄せる。
早まって吩咐(いいつ)けたことを、早まって仕過ぎた！----
あれは何だ、影のように漂って来るのは？

真 夜 中

四人の灰色の女登場す。

第一の女

私の名は不足よ。

第二の女

私の名は負い目よ。

第三の女

私の名は憂いよ。

第四の女

私の名は辛苦よ。

三人にて

扉が締まっていて這入れないわ、
中に福人(ふくじん)が住んでいるから、私達には這入りにくいよね。

不 足

其処では私、影になってしまうわ。

負 い 目

其処では私、亡くなってしまうわ。

辛 苦

あの人達は贅沢(ぜいたく)ずれのした顔を私に背けるわ。

憂 い

姉妹(きょうだい)の皆さん、貴女方は這入れもしないし、入れられもしない。
憂いは鍵穴から忍び込んでやるわ。

(憂い、姿を消す)。

不 足

灰色の姉妹達、みんなで此処を立ち退きましょうよ。

負 い 目

私、貴女の側にしっかりくっついてよ。

辛 苦

その踵にしっかりくっついてお供してよ、辛苦は。

三人にて

雲が漂う、星が消える！

あの、背後(うしろ)を御覧、背後を御覧！遠くから、遠くから
彼処に兄弟が来る。彼処にあの人が来る、あの.....死苦が。

(退場)。

ファウスト(宮殿内にて)。

三人来るのが見えた、帰ったのは三人だけだ、
話の意味はわかり兼ねた。

耳に残った響きは、たしか----辛苦だった、
その後を承けた陰気な押韻の言葉は----死苦だった。

それはうつろに、幽霊じみて曇って、響いた。
まだ俺は自由な世界に出るまでに戦い抜いていない。

俺の行路から魔法を遠のけて、
呪文というものを綺麗さっぱりと忘れたいものだなあ。

自然よ！お前の前に男一匹として立つのだったら、
人として生きるのも生き甲斐があるだろうに。

俺も以前にはそうだったのだ、人生を晦冥の中に求めて、
冒涇の言葉を吐いて身も世も詛ったあの時の前には。

今は、こういった怪異が空中に満ち満ちて、
それをどう避(よ)けて好いかは、誰にもわからないほどだ。
縦令(よしや)白昼が朗らかに理性的に我々に笑いかけてくれても、
夜は夢幻の網の中に人を捲き込んでしまう。

心嬉しく浅緑の野から帰って来ると、
鳥が嗄(しゃが)れて啼く。何と啼くか？凶と啼きおる。

且暮(あけくれ)迷信に這い纏(まつ)わられている！

姿が見える、前兆がある、警報が来る。

そんなにして我々はびくつきながら一人で立っているのだ。

門ががたりとする、そうして誰もはいっては来ぬ。

(竦然(しょうぜん)として)。

誰か来ているのか？

憂 い

その問いには、はい、と答えずにはなるまい！

ファウスト

そうしてお前----一体お前は何物だ？

憂 い

兎に角来ている者です。

ファウスト

下がれ！

憂 い

居るべき処に居るのです。

ファウスト

(始めには立腹し、さて心を鎮めて自らにいう)。
気をつけるが好い、呪文なんぞは唱えまいぞ。

憂 い

耳に私の声が聞こえなくとも、
胸には淀んで響かずにはおくまい。
いろいろに姿を変えて、
怕(おそ)ろしい威力を私は揮う。
陸路(くがじ)にあっても、浪の上でも、
永遠に心を苦しめる伴侶(つれ)で、
何時でも見つかるが、喜び求められた例(ためし)がなく、
詛われもするが機嫌もとられる。
お前さんは一度も憂いを知らなかったのですか？

ファウスト

俺はただ、世の中を駆けて通った。
あらゆる歓楽を髪で引っ掴み、
意(こころ)に満たぬものは衝(つ)き放して、
擦り抜けたものは去るに任せた。
俺は只管(ひたすら)に渴望しては、只管に遂げ、
それから又も望みを掛けて、そんな風に威勢よく、
俺の生涯を暴れて通った。始めは盛んに、押し強く
今では賢く、思慮深く這って居る。
地上のことはもう知り抜いた、
あの世への展望は人間業で出来ることではない。
眩しそうに眼を彼方へ向けて、
雲の上に自分に似た者を空想する奴は馬鹿だ！
しっかり足を踏ん張って、此处で自分の周囲(まわり)を見ろ。
優れた奴にはこの世が言葉惜しみはせぬ。
何で永遠の境にふらふら迷い込む要があるろう！
自分の認識するものは、手で握られる。
そんな風にして地上の日を送っていくが好い。
縦令(よし)妖怪が覗いて出るにしろ、自分の道を進め、
前進の途上には、悩みにも逢おう、幸(さち)にも逢おう、
どうせどの刹那にも満足せぬ男のことだ！

憂 い

誰でも私の手に入れるが最後、
その人には全世界がなんにもならぬ。
永遠(とわ)の暗さが降り被さって、
日は昇りもせず沈みもせず、
外部の官能は完全でいながら、
心の内には暗黒が巢喰う、
そうして宝という宝も
我が物とする術を失う。
福も禍も共にふさぎの虫となって、
充ち足らいながら飢えに悩む。

歓喜にもあれ、心労にもあれ、
それを翌る日に送り延ばして、
ひたすら未来を待ち受けるのみで、
決して仕上げが出来はしない。

ファウスト

よせ！そんな手で参りはせぬぞ！
そんな譚言(うわごと)は聞きたくもない。
うせあがれ！そのいまいまいしい御題目には
どんな賢い男もまやかされずには置くまい。

憂い

行くが好いか、来るが好いか、
凡そその人には決断がつかない。
開けている道の真ん中に居ながら
手探りをして小股によろぼう。
愈々深く路に迷って、
あらゆる物を藪睨みに見て、
自分にも他人にも荷厄介になって、
一息衝くかと思うと又息苦しがる。
窒息もせぬが活気もなく、
絶望もせぬが専念もせぬ。
そういった絶え間のない廻転、
苦しみながら措(お)き、嫌々ながら勤め、
気軽になったり、圧迫を感じたり、
半端な眠り、ぱっとせぬ休養----
こうしたことがその人を其の場に縛りつけて
地獄へ墜つる身支度をさせる。

ファウスト

詛われた妖霊ども！お前達はそんな風に、
百度(たび)も千度も人間仲間を取り扱うのだ。
何の事もない日々をさえ、お前達は
網に纏(まつ)われた苦悩の、堪らない混乱に化してしまうのだ。
俺も知っている、人は妖霊から身を脱(のが)れることは難しく、
霊の厳しい絆は引き放すことが出来ない。
けれども、こりゃ、憂いよ、潜行しつつ偉大な
お前の力をも、俺は認めて遣りはせぬぞ。

憂い

その力を思い知るが好い、私が素早く
詛いをかけてお前さんに背中を向ける時に！
人間は一生涯盲(めくら)で通すものだ、
さあ、ファウスト！お前さんも茲(ここ)で盲におなり。
(彼に息を吹きかく。退場)。

ファウスト(盲(めし)いつつ)。

夜が益々更けて来るらしい、
だが内には明るい光が輝いている。
思っただけの事を急いで仕上げて了おう、
主人の言葉こそ何よりも重みを与えるものだ。
家隸ども、寢床から起きい！一人も残らず！
俺が大胆に計画したことを美事に仕遂げて見せてくれい。

道具を手持て、鋤鍬(すきくわ)を使え！
標(しる)した仕事を是非すぐにしろ。
厳格な規律と早速(さそく)の勤勉、
それについて来るのが無上の報いだ。
この大事業を完成するには、
千本の手を使う一つの頭で足りる。

宮殿の大いなる前庭

松明。

メフィストーフェレス(頭として先に立ち)。
遣って来い、遣って来い！はいって来い、はいって来い！
ひよろひよろ足の死霊ども、
靱帯(じんたい)と腱と骨とを
つづくり合わせた半端者ども。

レムル共(合唱にて)。
すぐに御用に罷(まか)り出ました、
どうやら聞こえたところでは、
随分広い地面があつて、
それを私共に下さるそうな。
尖った杵(くい)は此処にある、
測量用の長い鎖も。
なぜ私どもが呼ばれたのやら、
それはもう忘れてしまふた。

メフィストーフェレス
技術家めいた手数は、此処では無用だ。
尺は手前の体で取れ。
一番長いのが長々と寝そべろ、
ほかの奴等は芝生をぐるりと刈れ。
俺達の親爺どもにしたように、
長く四角に掘り窪めろ！
御殿から狭い家の中へ----
つまりはこういう馬鹿な事になるのが落ちだ。

レムル共
(おどけたる身振りにて掘りながら)。
俺も若くて、生きていて、色恋をした頃は、
随分甘(うま)かったような気がする。
陽気な音(ね)がして面白そうにやっている処では、
俺の脚も浮かれ出したものじゃった。

そのうち老いという意地悪者が
撞木(しゅもく)杖に縋(すが)って音信れおった。
俺は躓(つまづ)いて墓の向こうへ転げ込んだ、
なぜ又あの扉が生憎開いていたことやら！

ファウスト
(宮殿より歩み出で、扉口の柱を手探りす)。
あの鋤(すき)のからから鳴るのが実に俺を喜ばせる！
あれは俺の命に従う大勢の者で、
大地を大地に返し、

波に關をすえて、
巖かな埒で海を取り繞(めぐ)らすのだ。

メフィストーフェレス(傍白)。
お前さんはただ俺達のために骨を折るのだよ、
土手を築くのも、突堤を突き出すのも。
お前さんは水魔のネプツーン達に、もう
大判振る舞いの用意をしているのだからな。
どっちにしたってお前さん達は助からない----
四大は俺達とぐるになって居る、
なんでも詰まりは破滅に終わるのだ。

ファウスト
頭！

メフィストーフェレス
此処です！

ファウスト
出来る限りのことをして、
人夫をいくらでも沢山駆り集めい、
楽しませたり締め上げたりして元気を付けい、
金も遣り、おびきもし、圧制もせい！
毎日俺は報告を受けたい、
計画した堀割がどれだけ延びたか。

メフィストーフェレス(声を潜めて)。
こっちの聞いた知らせには、
堀ではなくて墓地の話があるのだて。

ファウスト
一つの沼地があゝの山沿いを向こうに延びて。
瘴氣がこれまで拓いた土地の一切を汚して居る。
その腐れ水に捌け口をつけて遣るのが、
最後で又最高の開拓なのだ。
俺は幾百万の者の為に土地を開いて、
安全ではなくとも働いて自由に住まれるようにしてやりたい----
野は緑に実り多く、人も家畜も
すぐに、気持ちよく、真新しい土地の上に、
大胆で骨惜しみせぬ民の盛り上げた
あの力ある丘に沿うて、すぐに居着く。
この内側は樂園の地となっている----
よし外には潮が縁(へり)まで狂い寄せようとも。
潮が無理強いに押し込もうとして奇襲すると、
協同の心が、急いでその穴を塞ぎに集まる。
そうだ！俺は全身を挙げてこの心に帰依する、
それは人智の最上の断案だ----
凡そ生活でも自由でも、これに価する者は、
ただ日毎にそれを戦い取らなくてはならぬ者に限る。
だから此処では、危険に取り巻かれながら、
子供も大人も年寄りも、勇健な年を送るのだ。
俺はそういう群れを目に見て、
自由な土地の上に自由な民と共に住みたい。

この瞬間に向かってこそ俺は呼びかけても好かろう----

まあ、待て、お前は実に美しい！と。

俺の地上の日々(ひび)の痕跡(あと)は

幾劫(いくごう)を経ても滅ぶことはあるまい。----

こういう高い幸福を予感しながら

今、俺は最高の瞬間を味わうのだ。

(ファウスト倒る。レムル達支え持ちてこれを地上に横たわらしむ)。

メフィストーフェレス

どんな快樂(けらく)にも飽き足りず、どんな幸福にも甘んぜず、
この男は交々(こもごも)遷(うつ)り行く姿を追うて挑んで歩いた。

最後の、下らぬ、空虚(うつろ)な瞬間になって、

この気の毒な奴はそれを取り留めて置こうと願う。

随分手酷く俺に逆らったものだったが、

時が物を言うて、親爺(おやじ)奴、此処に、沙(すな)に交じって倒れていやがる。

時計は止まった----

合 唱

止まった！真夜中のように黙って居る。

針は落つる。

メフィストーフェレス

針は落つる、事は畢(おわ)った。

合 唱

おしまいになった。

メフィストーフェレス

おしまいだと！馬鹿な言葉だな。

なぜおしまいにするのだ？

おしまいにするのと純粹の無とは、全く同じ事だ！

では、一体何になるというのだ、永遠の創造は！

創造した物を無に追い墮(お)とすのは！

「今何やらがおしまいだ！」それに何の意味が読める？

それは元から無かったのと同じじゃないか。

それを、何か有るようにどうどう廻りをして居やがる。

それよりか、俺は永遠な虚無が好いな。

埋 葬

レムル(独唱)。

こんなにまずい家を誰が建てた？

しゃべるを使い、鋤(すき)を持ち。

レムル共(合唱)。

麻衣(あさごろも)を着た陰気者のお前には、

これでも結構過ぎるのだ。

レムル(独唱)。

こんなにまずい広間飾りは誰がした？

卓(つくえ)と椅子とは何処にある？

レムル共(合唱)。

それはちょいとの間借り物だ、
債手(かして)の数の多いこと。

メフィストーフエレス

体は倒れている。霊は逃げ出したがっている。
大急ぎであの血書の書付を見せてやろう。----
だが弱るのは、近頃、霊魂を悪魔の手から取り上げるのに
色々種々の手段があることだ。
昔流で行くのは不評判だし、
今風にも俺達は馴染みがない。
昔なら俺一人でやっつけたろうが、
今では手伝いを連れて来なくちゃならん。

俺達には、何をするにも都合が悪くなった！
在り来たりの慣習も、昔からの権利も、
もう何一つあてにすることが出来ん。
これまでは最後の息と一緒に霊魂が飛び出したものだ、
それを俺が待ち伏せして、極素早い鼠のような奴でも、
どっこい！それをしっかり握った利き爪の中に掴み込んだものだ。
今では奴が愚図々々して、あの陰気な場所を、
厭な屍骸の胸悪い家を、出たがりやがらない。
互いに喩(いが)み合う四大が
到頭恥を搔かして奴を逐い出すのだ。
そうして俺が毎日毎時苦勞を尽くしていても、
何時？どう？何処？という奴が厄介な問題でね。
老いぼれの死が昔のすばしっこい力をなくなしてしまって、
死んだのか？ということからがもう疑問なんだ。
幾度となく俺はしゃちこ張った体に色目を遣って見ていた。
それはただ見掛け倒しで、奴、むくむくと又動き出しやがった。
(怪奇にして嚮導(きょうどう)兵らしき招霊の身振り)。

さあ、さっさと来い！二倍の駆け足だ、
直角(すぐつの)の先生、曲角(まがりつの)の先生、
型も目方も誤魔化しなしの門閥家の悪魔殿。
序でに地獄の脛(あぎと)も一緒に持って来い。
無論地獄の脛の数は、多いこと！多いこと！
其奴が身分や位に応じて嚙(の)み下すのだ。
併しこの最後の洒落にしてからが
これからは大してやかましくもあるまいて。
(恐ろしき地獄の脛左の方に開く)。

犬歯まで開(あ)いたぞ。詛いの円天井から
火焰の流れが凶暴に湧いて出る、
そうしてその奥の熱気の濃い烟の中に
永遠(とわ)の熱火の、焰の市が見える。
紅の怒濤は歯並みの側(そば)まで押し寄せて来る、
詛われた奴ばらは、救われたさに泳ぎつく。
併し巨大な猛狗(もうく)がそれを噛み砕くので、
奴等は覺束なくも又熱火の旅路を繰り返すのだ。
隅々にはまだ数々のものが見つかるだろう、
狭過ぎる場所に恐ろし過ぎるものがひどく多いことだなあ！
罪人どもを嚇(おど)かすのは、全くいいことだよ、
それでも奴等は、これを嘘だまやかしだ夢だと思ってやがるのだからね。

(短き、直なる角を持てる肥大鬼どもに)。

おい、火の頬をした、太鼓っ腹の下司(げす)ども！
燐のような物が光らないか、下の此处を見張っておれ----
それこそ靈魂だぞ、羽の生えた蝶(プシュヒエ)だぞ。
そいつを筆(むし)って見ろ、醜い蛆虫(うじむし)にならあ。
俺がそいつに俺の極印を打って遣る、
その時そいつを持って火焰の渦巻く嵐の中を逃げろ！

下(しも)のあたりを見張っているよ、
革囊ども、それがお前達の務めだぞ。
奴がその辺に住む気になっているかどうか、
そこまではっきりしたことはわからない。
兎角臍(へそ)には住みたがる奴さ----
好く気を付けていろ、彼処から脱けて逃げ出すだろうぜ。
(長き、曲がれる角を持てる痩せ鬼どもに)。

そんな風来者ども、先達に立つ巨人ども、
虚空を掴んでいろ、休みなしにやって見ろ。
臂(ひじ)をぐっと伸ばして、鋭い爪を見せて、
ふらふら、ちらちらする奴を攫(つか)まえるのだぞ。
奴は古家の中に居るのがきつと厭になっているだろう、
それに天才という奴は、すぐにも上に抜けたがるものだ。
右の方、上より栄光。

天軍の群れ

来よ、御使い達、
天なる族(うから)よ、
悠(ゆるや)かに翔(かけ)りつつ。----
罪人を赦し、
塵に命あらしめむため。
なべてのものに
優しき痕、捺(な)さなむ、
たゆたう列(つら)の
漂(た)い(ま)の間(ま)に。

メフィストフェレス

厭(いと)な音が聞こえるぞ。堪(た)らぬ乱調子だな。
そいつが上の方から、待ちもせぬ光明と一緒にやって来(き)おる。
あれは小僧とも娘(むすめ)っ子ともつかぬ出来損ないだ、
信心(しん)ぶった趣味(しゅみ)にはあれが気に入るのだろうよ。
お前達も知っているなあ、俺達(われら)がひどく焼け糞(くそ)になった時に、
人間の血筋(けぢん)を絶(た)やそうと思案(しゆあん)を廻(まわ)らしたことは。
その後俺(われ)が発明(はつめい)した一等(いちとう)ひどい破廉恥(はれんち)が、
奴等(やつら)の信心(しん)には丁度(ていど)持って来(き)いなのだ。

彼奴等(やつら)が表(うわべ)を繕(つくろ)ってやって来(き)やがる、あのいい気(き)な野郎(やろう)どもが！
こんなにして幾人(いくにん)も俺達(われら)からひったくって、
こっちの武器(ぶき)を使って俺達(われら)に刃向(や)かうのだ。
彼奴等(やつら)だって悪魔(あくま)だが、ただ面(めん)を被(か)って居(ゐ)やがるだけだ。
此处(こゝ)で負(ま)けるとお前達(めま)の永遠(えいゑん)の恥辱(ちじよく)だぞ。
墓(はか)の側(そば)へ寄(よ)れ、縁(ふち)をしっかりと守(まも)って居(ゐ)ろ！

天使の合唱(薔薇を散華しつつ)。

薔薇(しょうび)の花、赫(かがや)くもの、
霊(く)しき香りを放つものよ！
ひらめきつ、漂いつ、
みそかに命を送るもの、
小枝を翼として、
蕾よりふふみ出ずるものよ、
疾く往きて花咲け。

春ゆ芽ぐみ出でよ、
紅よ、はた緑よ。
樂園を運び来て、
憩える者に齎せ！

メフィストフェレス(悪魔どもに)。

何だって屈(かが)んだりびくついたりするのだい？それが地獄の流儀かい？
しっかり踏みこたえて、勝手に撒かして置け。
野郎ども、銘々持ち場に就くのだ！
多分奴等は、こんな花いじりで
熱火の悪魔を雪埋(ゆきう)めにしてしまう気なんだろう。
そんなものは、お前達が息をすれば、解けて縮れてしまうんだ。
さあ、ぷっぷと吹けよ、火吹き鬼奴！----それで好い、好い！
お前達の息吹(いぶき)で、散華がみんな色褪めおるわ。----
おい、そうひどくやるなよ！口と鼻とを締めい！
やれやれ、余りひどく吹き過ぎたな。
お前達はまるで程というものを知らんのだなあ！
縮れるのを通り越して、茶色になるわ、乾反(ひぞ)るわ、燃えるわ！
もう毒々しく澄んだ焰をあげて飛んで来やがる、
そいつに向かってうんと頑張れ、みんなしっかり一つに固まっている！
や、勢いが挫けたな。まるで意気地がなくなったな！
悪魔どもが、渡りものの、ねっとりと絡む熱を感じ出したな。

天使達(合唱)。

聖(きよ)き御(み)花、
嬉しき焰、
愛を弘め、
歓の設(もうけ)す、
心の望むままに。
真(まこと)なる言葉、
澄める空の瀬気(こうき)は、
永遠(とわ)なる群れへの
限なき真昼日。

メフィストフェレス

なんたるぞまだ！恥を搔きおれ、馬鹿者ども！
悪魔ともあろう者が逆立ちをして、
不細工な体でぐるぐる翻筋斗(とんぼがえり)を打って、
けつから先に地獄へ堕ちて行きやがる。
自業自得の熱湯(あつゆ)を有難く頂戴しろ！
併し俺はこの持ち場に踏み止まってやるぞ。----
(漂い来る薔薇を払い廻りつつ)。

鬼火奴！うせやがれ！おい！どんなに光ったって、

掴んで見れば、貴様は胸糞の悪いべとべと粥(かゆ)なのだ。
何をふらふらしておる！ひっこみやがれ、やい！----
爹兄(ちゃん)か硫黄のように頸筋にべたつきあがるなあ。

天 使(合唱)

汝達(なんじたち)の物ならぬをば、
汝達、避けではかなわじ。
汝が心を紊(みだ)るものは、
汝達受けぬぞ好き。
猶強いて迫り来むとき、
我等奮い立たでやは。
愛のみぞただ、愛する者を
引き入るるなる。

メフィストーフェレス

ああ頭が燃えるぞ、胸も肝も燃えるぞ、
超悪魔の火だな！
地獄の火よりもずっと痛いわい。----
これだからこそお前達はあるに方途(ほうず)もなく歎くのだなあ、
不幸な恋人ども！刎(は)ねつけられて、
頸を捻じ曲げて恋人の方を覗き込むお前達。
俺もその仲間と来やがらあ！この頭をあっちへ引っ張り寄せる力は何だ？
彼奴等と誓いを立てた喧嘩をしている俺じゃないか！
いつもはあの恰好がひどく挑戦するように見えたものだがなあ。
えたいの知れぬものが体の隅々まで染み渡ったというわけか？
俺はあの妙に愛くるしい少年どもが見たくてならない。
俺を引き留めて、詛いを吐かせぬようにするものは一体何だ？----
若しも俺までぐにやりとなろうもんなら、
この先、愚物の称号を奉られる奴は誰だ？
俺の大嫌いな悪童どもが
どうも馬鹿に愛くるしく見えて来るなあ！----

おい、美しい子供達、俺にきかしてくれ、
お前達もやっぱりルーチファーの一族じゃないかい？
いかにも可哀らしいなあ、ほんにきすでもして遣りたい、
丁度いい所へ来て貰ったように思うよ。
俺の心持ちは、ひどくうっとりして、もう千遍も
お前たちを見たことがあるように、ひどく馴染んで、
こっそりと猫じみた欲がひどく催して来る。
見れば見るほど美しさが増して来おる。
さあ、こっちへ寄って、一瞥(ひとめ)でも恵んでくれんかい！

天 使 達

行きますとも。なぜ尻込みをなさるのです？
さあ寄ります。出来るなら、そのままいらっしゃい。
(天使達回旋しつつ悉くその場を占む)。

メフィストーフェレス

(前舞台へ押し出さる)。
お前達は俺達を詛われた霊だと悪く言うが、
そっちの方こそ本物の魔法遣いだぞ。
お前達は男も女も迷わすのだからなあ。----
何という怪しからん目に逢うことだ！

これが愛の元素という奴かい？
この体中がみんな火になっている、
頸筋にやけつくのなんぞはわからん位だ。----
ふわふわ往ったり来たりしているお前達、降りて来い、
その優しい手足を、も少し俗に動かして見ろ。
ほんに、その真面目くさった所がお前達によく似合うなあ！
だが一度でいいから、お前達のにこりとするところを見たいものだ。
そうしたらそれが、俺のいつまでも忘れられぬ歓びになるであろう。
俺の注文は、惚れた同士が互いに見交わすときのあれだ----
口をちょいと曲げれば、それでいいんだ。
そののっぽの小僧さん、俺はお前を一等嬉しく頂戴するね、
その坊主面はちっともお前の柄に嵌まらない、
もそっと色気を出して俺を見てくれ！
それにもっと行儀に肌を見せるような風をして歩けそうなものだ、
その長い襷袢は道德堅固に過ぎらあ----
奴等あっちへ向きおるな----あのうしろつきわい！----
畜生奴、全く以て旨そうだなあ。

天使の合唱

いざ澄む方へ向け、
愛の焰等！
自ら詛いに居る者を
真(まこと)よ、癒やさなむ。
かくて彼等悪を逃れ、
歓びて救済(すくい)に入り、
一切俱会(ぐえ)のうちに
福(さいわい)享けむため。

メフィストフェレス(気を取り直して)。

変な気持だなあ！----約百(ヨブ)のように、体中火ぶくれだらけで、
自分で自分が無気味に思えるけれど、
それでも亦凱歌をあげる気にもなる。自分をすっかり見窮めて、
自分と自分の血筋とに信頼すればだね。
悪魔の高尚な部分は助かって、
色恋のお化けが皮膚だけに集まっている。
もう悪(にく)むべき焰は燃え尽きた、
そうして定法通りに、俺は一纏めにしてお前達を詛って遣るぞ！

天使の合唱

聖なる火よ！
この火の漂い包まむ人は、
世にありて、善き人と共に
幸(さち)を身に覚ゆべけれ。
皆ともに一つとなり、
起(た)ちて称えよ、
風は浄められぬ、
霊よ、息衝け！
(彼等ファウストの不死なるものを奪いて、昇天す)。

メフィストフェレス(見廻しつつ)。

はてな？----奴等は何処へ失せやがった？
丁年未満の奴等、だしぬけに俺を驚かして、
獲物を持って、天(そら)高く飛んで逃げおったな。

道理でこの墓穴をそっと覗いていやがったのだな！
俺はたった一つの大きな宝をちょろまかされてしもうた、
自分で自分を俺の質草に入れた、あの高尚な靈魂を、
奴ばら、狡猾にも、俺からひったくって行きやがった。
今になって俺は、誰に苦情を持ち込んだら好いんだ？
誰が俺の獲得した権利を擁護してくれるんだ？
手前、その年になって騙されやがったな。
自業自得だ。ひどく不景気だぞ。
俺は言い訳の立たん下手を遣りおった、
面目次第もないや！大骨折をして遣り損なうなんて。
卑しい情欲や馬鹿気た色気に負けたからなあ、
甲羅の生えた悪魔の癖に。
あんな子供じみた、たわけた事に、
世慣れた賢い奴がひっかかったのだから、
全く並大抵ではないことになるのだて、
おしまいには奴を掴まえた馬鹿さ加減は。

山峡、森、巖、弘陵の地

聖なる隠者達、山に添いて上昇的に分かれたれ、巖穴の間に座を占む。

合唱と飴

森は揺らぎつつ靡き近づき、
巖はこれにその重みを寄せて、
木の根固く巖を掴み、
幹と幹相寄りてそそり立てり。
川浪の相逐うて泡立つ中を、
いと深き洞(ほらあな)は隠れ家をなす。
獅子は黙(もだ)しつつも優しく
我等をめぐりて逍遥(さまよ)い、
この浄められたる境、
聖なる愛の御庫(みくら)をぞ畏(かしこ)むなる。

法悦の師父(漂いつつ昇降す)。

とわなる歡喜の炎、
燃え立つ愛の契り、
沸き返る胸の痛み、
泡立つ神の悦楽。
征箭(せいせん)よ、我を射抜け、
槍よ、我を刺せ、
棍棒よ我を砕け、
雷火よ、我を貫け、
空しきものを
皆散らしめ、
とわなる愛の核(さね)、
久遠(くおん)の星を照らしめむため。

深奥の師父(低き処)。

我が脚下なる断崖の巖の
深き谷底に臨みて重々と座れる如く、
千筋の山川の輝きつつ流れよりて、
飛沫(しぶき)をあげて怖ろしき滝津瀬をなすが如く、
おのが逞しき衝動(うながし)のままに、轟々(すくすく)と
樹の幹の天そそり立つが如く、

大威力の愛こそは
凡てを造り、凡てを育(はぐく)め。

激つ瀬は我が身を周りに怒号し、
森も岩根も波立つばかりなれど、
ざわめきつつも心優しく、
豊かなる水嵩(みかさ)ぞ谷底に転び落つる、
谷間の土を濡(ぬ)れほさむ務めに。
雷火の閃きつつ下り撃つは、
毒と霧とを胸に抱ける
大気を浄め改めむためぞ。

こは愛の使い達なり。そはとこしえに造り成しつつ
我等を周りに揺らめく力をぞ宣(の)べ伝うる。
あわれこの力よ、我が心にも亦火を点ぜよかし。
其処に霊は、乱れあざなわりて冷えつつ、
鈍き官能の埒に囚(とら)われ、厳しく締むる
痛苦の鎖のうちに喘ぎ悩みつつぞ居る。
あわれ神よ！わが思量を和(なご)めて、
わが餓えたる胸を照らせよかし！

天使めく師父(中間の処に居る)。
何という暁の雲が、漂いながら
あの樅林のゆらめく髪の間を縫って来ることだろう。
あの中に生きているものは何か、わしの予感当たっているかしらん？
あれは幼い霊どもの群れだな。

祝福せられたる童子の合唱

父よ、聞かして下さい、僕達は何処を飛んでいるのですか？
好い方よ、聞かして下さい、僕達は何になっているのですか？
僕達は幸福(しあわせ)です、誰も彼もみんな
こうして居るのを本当に安らかに感じています。

天使めく師父

子供達！真夜中に生まれて、
精神も官能も半ば醒めたのみで、
両親にとってはすぐに失われた代わり、
天使達にとっては偽物となったお前達。
愛を知る者が一人此処にいることは
お前達にもわかろう、構わず近くお寄り。
併し峻しい世間の道は、
幸福者(しあわせもの)よ！お前達には何の痕をも留めて居ないのだ。
降りて来い、わしの眼の中に、
此の世向きな、地上向きな、この道具の中へ。
お前達は自分のもの同様にそれを使うことが出来る、
この四辺(あたり)の様子をよく見るが好い。
(童子等をその体内に納む)。

あれが樹だ、あれが巖だ。
あれが水の流れで、転(まろ)び落ちて
どうどうと激(たぎ)ちながら
峻しい道を短く流れるのだ。

祝福せられたる童子達(眼の中より)。

えらい見物(みもの)ですねえ、
でも此处はあんまり物凄い、
怖(こわ)くて怖ろしくて身慄いがします。
気高い、親切な小父さん、あっちへ行かして下さい！

天使めく師父

ではもっと上の境へ昇って行け、
知らぬ間にもずんずん大きくなるがいいぞ、
いつまでも浄らかに雑(ま)じり気なく、
神様のお前に出てお力をいただくままに。
それが霊達の滋養となって、
何とも云えず広々とした瀬気の中に充ち、
又永遠な愛の啓示として、
展(ひら)いて浄福になるのだからな。

祝福せられたる童子等の合唱

(山の絶嶺を周りつつ)

手を繋ぎつつ、
嬉しく、同胞(はらから)の輪をなし、
さて踊り歌わなむ、
聖(きよ)き心ばえをば！
神の御教え受けつつ、
汝達頼る道を知らむ、
汝達の敬い畏(かしこ)む者を
汝達見奉(たてまつ)るべし。

天使達

(ファウストの不死なるものを担いつつ、更に高き境に漂う)。

霊の世界の尊い一人が
悪の手から救い出されました----
「何人にもあれ、絶えず努め勤(いそ)しむ者を、
私達は救いに導くことが出来る」。
それに此の人には、上からの
愛さえ加えられたのです。
祝福された方々の群れが此の人を
心から歓迎なさるでしょう。

稚(いとけな)き方の天使達

愛ゆえに聖なる、贖罪の女達の
手(て)ずから授けられたあの薔薇が
私どもを助けて勝ちを得させ、
私どもにあの尊い仕事を遂げさせ、
この霊の宝を分捕らして下さいました。
私どもが撒(ま)くと悪がたじろき、
私どもが中(あ)てると悪魔が逃げ出しました。
日頃馴れている地獄の責め苦の代わりに
悪魔どもが愛欲の悩みを感じました。
あの年を経た悪魔の大將でさえ
酷(きび)しい痛みに身を貫かれたのです。
歓呼をあげましょう！事は成りました。

成熟せる方の天使達

私どもには下界の残り屑を
担って運ぶのが苦痛です、
よしや火浣布(かかんぷ)で出来て居ても、
それは清浄ではありません。
剛毅な霊の力が
もろもろの元素を
身に搔き寄せて持っている、
如何なる天使でも
密に結び合った二つのものの
一つになった二重性を引き離し得ませぬ。
ただ永遠(とわ)の愛のみが
それを分かつことが出来るのです。

稚(いとけな)き方の天使

巖山の高みを巡って霧と棚引き、
気(け)近く動き寄って来る
霊達の気配を、今
私は感ずる。
片雲は澄んで来る、
あれは賑やかな群れをなす
祝福せられた童子達です、
あれは下界の重圧を脱れて、
輪をなして連れ立ちながら、
天上界の
新しい春のまぐわしさに
元気を養っているのです。
この人も、手始めに、
段々に完成に近づき登るように、
この群れの仲間になるが好いでしょう。

祝福せられたる童子達

喜んで僕等は、蛹(さなぎ)の時期にある
此の人を引き受けましょう。
これで僕等は天使の質(しち)草を持つことになります。
此の人を包み込んでいる
繭屑(まゆくず)を取って上げて下さい！
もう聖なる生(いのち)のために
美しく大きくなり出しました。

マリアを崇(あが)むる博士

(最も高き処にあるいと淨き窟にて)。
此处は眺め広やかにて、
霊ぞ高めらるる。
彼方を過ぎ行く女人の群れは
漂いつつ上に向かう。
その真(ま)中に星の冠して、
類(たぐい)なき君、
天の元后、
耀きの中に拝まれ給う。
(歓喜に酔いて)。

世をしろしめす至高の女王よ！
願わくは青く張られたる

天の幕屋のうちに、
御身の深秘を示させ給え。
男たちの胸を、厳かにも
優しくも揺り動かし、
聖なる愛の喜びをもて、御身に
向かわしむるものを受けさせ給え。

我等の勇は侵し難からむ、
御身畏(かしこ)く命(おお)せ給うとき。
熱せる心直ちに和(やわら)がむ、
御身我等を足らわし給わば。
こよなき意味にて浄き処女(おとめ)、
崇め奉るべき御母、
我等が為に選ばれたる元后、
神々と位を等しくする御(おん)方。

彼君をめぐる
軽き片雲ぞ
贖罪の女達なる。
その優しき小さな群れは
君が御(み)膝をめぐりて
瀬気を吸い啜り、
御(み)恵みを請いのむ。

触るるを許さぬ御身にも、
誘いに堕ち易き人々の
頼りつつ近づきまつるをば、
禁(とど)められおわすまじ。
弱き性(さが)に引き入れらるるとき、
彼の人々は救うこと難し。
何人か己の力恃(たの)みて
楽欲(きょうよく)の鎖ひきちぎり得む？
斜に、滑らかなる床の上には、
足の迂ること、如何に早き？
眼配せ、会釈、媚びある呼吸(いき)に
迷わされぬ者誰かあるべき？
栄光の聖母天翔り来る。

贖罪の女達の合唱

お身は天翔り昇り給う、
永遠(とわ)なる国々の御(み)空高く。
我等の願いを聴かせ給え、
比べむものなき御身、
御(み)恵み深き御身よ！

罪いと深き女(ルカ伝七章三十六節)。

パリサイ人等の嘲(あざけ)りにも拘わらず、
神と浄められ給える御子(みこ)の御足(おんあし)に
涙をばバルザムなす瀧(そそ)ぎまつりし
かの愛によりて願い奉る。
奇しき香りをいと沢に滴(したた)らしたる
かの瓶(へい)によりて願い奉る。
聖なる御手足(おんてあし)をいとも軟(やわ)らかに拭いまつりし

かの捲髪(まきげ)によりて願い奉る----

サマリアの女(ヨハネ伝四章)。

そのかみアブラハムが家畜の群れを導き行かしめし
泉によりて願い奉る。
救い主の御(おん)唇に涼しく触るるを得し
釣瓶によりて願い奉る。
今は其処より灌(そそ)ぎ出でて、
さわに溢れ、とわに清く
世の隅々までも流れ繞(めぐ)る、
浄く豊かなる湧水(わきみず)によりて願い奉る----

埃及(エジプト)のマリア(聖人伝)。

人々の主を葬りまつりし
いと長き所によりて願い奉る。
警(いまし)めて扉口より我を押し返し給える
御腕(おんかいな)によりて願い奉る。
砂漠にありてわが忠実(まめやか)に守り来つる
四十年(よそとせ)の贖罪によりて願い奉る。
砂の上にわが書き記(しる)しつる
幸ある別れの詞によりて願い奉る----

三人にて

罪深き女子(おみなご)どもをも
傍より遠ざけ給わで、
贖罪の利益(りやく)をば
永遠(とこしえ)のものに高め給う御身よ、
ただ一たび自ら忘れしのみにて、
過ちすとは予(かね)て曉(さと)らざりし
この善き魂の為にも亦、その人にふさわしく
御赦(みゆる)しを垂れさせ給え！

贖罪の女の一人 曾てグレーチヒェンと呼ばれしもの。 (縋りまつりつつ)。

こちらをお向き下さいまし、
比べるもののない御(おん)方、
光明の遍満する御方、
御恵み深く顔を私の幸(さち)にお向け下さいまし。
昔の思い人、
今は濁を脱け出た人、
その人が帰って参りました。

祝福せられたる童子達

(輪を描きて動きつつ近づき来る)。
此の人はもう、僕達よりも、
手足がずっと大きく伸びました。
大事に世話をしあげた返報を
たっぷりと為(し)てくれるでしょう。
僕達は早いうちに
人の世の群れから遠ざけられました、
が、此の人は学んで来たのです。
この先は僕達に教えるようになるでしょう。

贖罪の女の一人 曾てグレーチヒェンと呼ばれしもの。

尊い霊の群れに取り囲まれて、
新参のあの方は御自分で御自分がわからぬほどでございます。
更新した生活にまだお気が付かない位なのに、
もう聖なる群れに似てお出でなさいました。
御覧なさいまし！あの方は地上の絆を皆切ってしまって、
古い皮から身を抜き出しておしまいになりました、
そうして瀬気の衣(ころも)を透かして、
最初の若々しい力が立ち顕れて参りますわ。
あの方にお教え申すことをお許し下さいまし、
まだ新しい目を眩しがってお出でになりますから。

栄光の聖母

さあ！お前、もっと高い空へおのぼり。
お前のことに気がつく、あれもついて行くでしょうから。

マリアを崇(あが)むる博士

(俯伏して礼拝しつつ)。
救いの御(み)目を仰ぎまつれ、
悔を知る、優しき皆人よ、
汝達、福(さいわい)ある運命(さだめ)の道に
み恵みを思いつつ新たに生まれむため！
なべての善き心は、勇みつつ
君に仕え奉るものとならなむ。
処女(おとめ)よ、御母よ、元后よ、
女神よ、永くみ恵みを垂れ給え！

神秘の合唱

常なきものはみな
ただ譬喩(たとえ)なれ。
遂げ難かりしもの、
此処に円現し、
言葉を越ゆるもの、
此処に成されつ。
久遠(くおん)に女性(によしょう)なるものぞ
我等を牽き昇るなる。

終